

大学地理教育におけるN I E授業の開発(1) —单元「瀬戸内再生」の場合—

小原 友行

大学地理教育におけるN I E授業の開発（1）

—単元「瀬戸内再生」の場合—

小原 友行*

Development of the Lesson Plan Through NIE in University Geography Education:
The Case of Unit “The Rebirth of Seto Inland Sea”

Tomoyuki KOBARA*

ABSTRACT

This paper explores using Newspaper in Education (NIE) to develop a theoretical hypothesis of how active-learning instructional methods can be applied to natural geography education at the university level. The lesson model is based upon the unit “The Rebirth of Seto Inland Sea”, which appeared in the *Chugoku Shimbun*. Through examination of the outcomes of the active-learning instructional method, suggestions for improvements in theoretical understanding and the practice are made.

キーワード：自然地理、N I E（教育に新聞を）、アクティブ・ラーニング、里海

1. はじめに—本研究の目的と方法—

本研究の目的は、大学教育の今日的課題でもある学生自身の主体的参加を可能にする授業方法の開発を、大学生に希望を与える「地域創生」（具体的には里海再生）に関する新聞記事を学習材として取り上げ、「N I E（教育に新聞を）」学習の視点から行っていくことである。具体的には、福山大学における共通教育科目として担当している授業科目「自然地理」「人文地理」「地誌」の授業において、新聞を活用したアクティブ・ラーニング型の授業開発に関する基本的な視点と方法（理論仮説）を構築し、それに基づく具体的な指導法を開発するとともに、授業の場での実践・評価を通して、資質・能力の向上を目指した大学における地理教育にとっての「N I E」学習の有効性を検証していくことである。

本稿では、そのうち2017年度前期の授業科目「自然地理（1）」¹⁾の中で開発した、中国新聞の連載記事「海に聞く 瀬戸内再生」を用いた単元「瀬戸内再生」の場合について考察していきたい。

前述の研究目的を実現するために、本研究においては、大きく次のような手順と方法で研究を進めていった。

- ① 大学教育における新聞を活用したアクティブ・ラーニング型の授業方法の理論構築と、それに基づく具体的な指導法開発のための単元の授業デザイン案を作成する。
- ② 地元の中国新聞社のN I E関係者と連携を図り、新聞を活用した授業方法の可能性について協働的に検討するとともに、教材となりうる連載記事・特集記事を検討する。
- ③ 仮説的に構築したフレームワーク案に基づき、担当する前期授業科目「自然地理（1）」（受講

*大学教育センター兼任教員・人間文化学部教授

生約90名)の中の4コマ分の単元計画の開発を行う。

④ 単元計画に基づき、4コマ分の授業実践を行う。その中に、連載記事・特集記事の読解、その記事の取材記者をゲストスピーカーとした授業の展開(出前授業)、それを受けての自分自身の意見や考えをまとめ発信する新聞づくりの活動を取り入れる。

⑤ 実施した授業実践の結果の分析に基づき、大学生にとっての「NIE」学習の意義と有効性を検証するとともに、理論仮説および単元の授業計画の修正・改善を図る。

本稿では、このような研究目的・研究方法に基づいて行った研究の成果として、現時点で到達している理論仮説と、それに基づいて開発した授業モデル、その成果と課題について考察していきたい。

2. 大学地理教育におけるアクティブ・ラーニング型「NIE」学習の理論仮説

(1) アクティブ・ラーニング型「NIE」学習の目標・内容・方法

学習材として新聞を活用する教育を、一般的には「NIE」(Newspaper in Education、教育に新聞を)と呼称している。「NIE」とは、学習者に生涯学習の基盤となる能力の一つである「情報活用能力」を育成するために、教育界と新聞界が協力して、新聞教材の開発と活用の研究・普及を目指して行っている取り組みである。また、「身近な情報源であり繰り返し読める」「保存し携帯できる」「情報が詳しい」「知りたい情報を選びながら読める」「昔のことを調べられる」「ニュースの背景を考えられる」「社説や投書などでいろいろな考えを知ることができる」といった新聞の持っているメディアとしての特性を生かしながら、情報化社会への対応や子どもたちの活字離れといった教育課題に応えることを目指して始まった取り組みでもある²⁾。

このような「NIE」の手法を大学教育に取り入れることは、アクティブ・ラーニング型の授業を成立させるうえで有効と考えられる。なぜなら、「NIE」では、表1のような学習活動が行われるからである。一つは、情報をクリティカルに分析し読解する活動と、もう一つは、情報をクリエイティブに創造し発信する活動である。

表1 「NIE」における主要な学習活動

情報をクリティカルに分析する	情報をクリエイティブに創造する
<ul style="list-style-type: none"> ・複数紙の1面や社説の読み比べ ・「なぜ、どうして」と問い、情報の背景を読む ・新聞記事の喜怒哀楽を見つける ・「平和」や「共存共生」といったキーワードをもって読む ・問い(5W1Hプラス1S)を見つけながら読む ・新聞社の紙面づくりにおける価値判断を読み解くなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・切り抜き新聞づくり ・取材体験活動 ・新聞紙面や見出しづくり ・投稿などの活動 ・新聞感想文 ・社説にチャレンジ ・NIEスピーチなど

(筆者作成)

これらの活動を通して育成可能な目標としては、次の5つの力(資質・能力)を指摘することができる。

- ① 問題発見力…学習材としての新聞記事から知的な問題や実践的な問題を発見することができる力(好奇心・探求心)
- ② 情報受信力…発見した問題を解決するために必要な情報を受信する力(情報収集力)

- ③ 探求力…知的な問題「なぜ、どうして」を解決していく力（思考力）
- ④ 意思決定力…実践的な問題「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」を解決していく力（判断力）
- ⑤ 情報発信力…解決した情報を発信する力（表現力）

これら5つの資質・能力は相互に関連しており、それらが繋がっている状況とは、具体的には、社会的な問題や課題に対する意見や考えを持っている姿であり、情報を知る・わかるだけでなく、その背景を熟考し、それに対する自分なりの意見や考えを持ち、それを表現しながらよりよい社会への参加・参画を考えていく力ととらえることができよう。これらは、変化の激しい現代社会を生きるために必要な力であると同時に、現代の若者に足りない力でもある。

なお、「N I E」学習の学習材としては、学習者である大学生が「希望を見つける」「希望が生まれる」ような、「新聞教材」を用意することが必要である。そのような学習材としては、次のようなものが考えられる。

- ① 地域・社会・世界や時代の課題を解決していった（いこうとしている）人間の問題解決の姿が現れている記事
- ② 「出会い・発見・感動」が生まれるような記事
- ③ 3つの「問い」（「どのように、どのような」「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」）が生まれるような記事

また、このような学習材としての新聞記事に働きかけるアクティブな「N I E」の学習活動としては、次のようなものを取り入れることが必要であろう。第1は、「主体的に学ぶ」、すなわち、自ら課題を発見し、追究し、その解決を試みる学習活動である。第2は、「協働的・対話的に学ぶ」学習活動である。なお、「協働的・対話的に学ぶ」とは、意見や考えの異なる3つの他者（「自分自身の中の他者」「教室内の仲間」「関係する専門家（新聞記者を含む）」）と学ぶような活動を意味している。そして第3は、学び合いを通して見方・考え方を深めることができるような学習活動である。具体的には、「なぜ・どうして、もっと知りたい新聞で」（思考する・熟考する活動）、「どうしたらいいの、みんな考えよう新聞で」（判断する・参加する活動）、「意見や考えを、みんなに伝えよう新聞で」（表現する・発信する活動）などが考えられる。

（2）単元の教材構成

このような目標・内容・方法に基づけば、単元の具体的な授業デザインにあたっては、先ず最初に、表2のような目標構造を前提に学習内容を選択していくことが必要となる。

具体的には、表2からも読み取れるように、1単元の中での「アクティブ・ラーニング」型の学習においては、「どのように、どのような」「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」を学生自身が発見し、それを協働的・対話的に追究していくような授業デザインが求められる。

また、授業の中で学生が主体的に思考・判断する「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」という問いが生まれるような学習材として、地域密着型の地域教材となる新聞記事を開発することが必要となる。具体的には、「アクティブ・ラーニング」型授業を成立させる学習材としては、次の3つのタイプが有効であると考えられる。

- ① 「社会的変化型」…社会の変化に伴う地域・社会・世界や時代の課題（願い）を解決（実現）していった（しようとしている）人間の問題解決の知恵
- ② 「社会的課題型」…グローバル化・多文化化への対応、E S D（持続可能な社会の形成）、防災・安全（公助・共助・自助）、主権者育成、地域創生（里山・里海再生）などの今日的な課題
- ③ 「論争問題型」…価値観や世界観の違いによって判断の分かれる社会的論争問題や歴史的論争問題

表2 単元レベルの目標の構造化

内容的目標 方法的目標		事象や課題	知る	わかる	生きる・つくる
		情報	知識	理解	学びに向かう力
学びに向かう	技能	「どのように、どのような」			
	思考力	「なぜ、どうして」			
	判断力	「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」			

(筆者作成)

(3) 学習過程の組織

1単元の学習がアクティブなものとなるためには、表3のような単元レベルの協働的な学習過程の組織が必要になると考えられる。

表3 学習過程のモデル

導入部 (発見)	<p>①学習問題の発見の過程である単元の導入部では、新聞に親しませるための活動や学習意欲を喚起するような新聞記事の紹介などを通して、学生が学習問題を自分自身の問題として発見していくことができるようになるための学習材との出会わせ方を工夫することが必要である。</p> <p>②また、どうしたら学習問題を解決することができるのかを考える、学習方法の話し合いや学習計画の立案を行うことが必要である。</p>
展開部 (追究)	<p>③学習問題の追究の過程である展開部では、新聞記事に取り上げられている事象や課題を「知る」ための新聞記事の記述(どのように、どのような)とそのまとめ・発表を行う。</p> <p>④次に、「わかる」ために、事象や課題に対して「なぜ、どうして」と問い、その背景の追究(解釈や説明)を行う。</p> <p>⑤また、なぜこのような記事を掲載したのか、新聞社の価値判断の背景を追究する。</p> <p>⑥事象や課題の背景と新聞社の価値判断の背景を考えるために、それを取材した新聞記者の出前授業を行う。</p> <p>⑦そして、より良い社会をつくるためには「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」と問い、クラスの仲間との意見交流を通して自分自身の意見や考えをまとめる。</p>
終結部 (表現)	<p>⑧学習成果の総合的表現の過程である終結部では、学習のまとめとして、自分自身の追究内容や意見・考えを新聞の形式で表現する。</p> <p>⑨教室の中でそれらを交流し、自己評価・相互評価の活動を行う。</p> <p>⑩更なる追究のための学習課題を発見する。</p>

(筆者作成)

3. 「地域創生」をテーマとした単元「瀬戸内再生」の授業計画の実際

（1）単元「瀬戸内再生」の概要

前述した授業開発のための理論仮説に基づけば、次のような授業計画が考えられる。「地域創生」をテーマに開発した単元「瀬戸内再生」の授業計画の概要は、表4の通りである。

表4 単元「瀬戸内再生」の概要

コマ	主要な問い	主要な活動
1	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の新聞の喜怒哀楽を見つけよう。 ・本日の新聞を坂本竜馬が読んだら、どの記事にどのような意見を持つのか。 ・なぜ中国新聞は「中国山地の今」「瀬戸内海の今」を正月の一面の記事としたのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞の読み方を学ぶ。 ・異なる他者の視点から読解する。 ・2016・2017年の正月の一面記事から地域創生の今日的課題を読み解く。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ今、瀬戸内再生が求められるのか。 ・中国新聞はなぜこのことを、今連載するのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国新聞「海に聞く 瀬戸内再生」の連載記事（第7部「次代につなぐ」「第8部「転換の時」）の主張を読み解く。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・瀬戸内再生のための課題は何か。 ・私たちはどうすればよいのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・取材記者による出前授業。 ・討議学習。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・「瀬戸内再生」に関するはがき新聞を作成して意見や考えを提案しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「はがき新聞」づくり。 ・交流活動。

（2）取り上げた連載記事「海に聞く 瀬戸内再生」

「自然地理（1）」の単元「瀬戸内再生」において取り上げた中国新聞の連載記事「海に聞く 瀬戸内再生」は、表5の通りである。なお、特集記事や関連ニュースは除く。

表5 連載「海に聞く 瀬戸内再生」（中国新聞）の記事一覧

第1部 痩せる漁場 連載（2016年12月9日～26日）	
①付かぬ色 周防灘 ノリの不作深刻	②入会の苦悩 不漁続き 強まる摩擦
③ガザミの浜は 干拓の代償 藻場消失	④カキ変調 餌不足 しぼむ生産量
⑤山波の州 アサリ減少 完全禁漁に	⑥「磯焼け」じわり 海底に異変 漂う浮泥
⑦トラフグどこに はえ縄発祥の島衰退	⑧規制の行方 豊かな海へどう転換
第2部 小さな脅威 連載（2017年1月30日～2月4日）	
①広島湾で マイクロプラ 波に漂う	②懸念 有害物質の「運び屋」
③名もなき浜 押し寄せる漂着ごみ	④コストの壁 養殖資材 流出防げず
⑤「見えないごみ」海底に堆積 回収困難	⑥プラスチック時代 微粒子ビーズ禁止拡大 欧米中心
第3部 分断の果て 連載（2017年2月20日～25日）	
①黒い水底 ヘドロ沖合に広がる 河口堰影響も	②海底湧水 細る「見えない栄養源」
③戻らぬ海砂 採取で壊された生態系	④垂直護岸 貧酸素 海底は死の世界
⑤人工の是非 天然干潟 再現難しく	⑥山へ 取り戻す栄養の循環
第4部 酸性化の足音 連載（2017年3月19日～21日）	
①下がる pH 大気中のCO ₂ 増加影響 生態系への打撃懸念	
②懸念 貝類すめなくなる環境も	③模索 藻場の新たな価値に光
第5部 カキの未来は	
米国編 連載（2017年4月23日～27日）	

- ①大量死 幼生むしばむ酸性化 専門家も驚く進行度
 ②酸性化の要因 CO₂含む海水 深部から湧昇
 ③動きだす対策 西海岸全域に拡大 国またぎデータ共有
 ④海藻の助け CO₂削減へコンブ養殖 ⑤市民参加 収穫体験で関心高める 環境団体自ら養殖場
 フランス編 連載 (2017年4月29日～5月3日)
- ①共同研究 地中海・広島湾タッグ アマモの力比較検証
 ②危機再び 貧栄養化で成育不良か ③保護 藻場に託す環境回復
 ④エコ養殖 「脱プラ」業者が率先 ⑤地域で守る 環境と養殖 共存模索
 第6部 改正瀬戸内法の現実 連載 (2017年6月1日～5日)
- ①クロダイの警告 栽培放流で繁殖 カキ餌食に
 ②水質管理 汚水処理場の緩和運転 広がり限定 ③地域之力 環境活動の継続模索
 ④環境教育 「海離れ」 地域で危機感共有を ⑤湾灘ごとに 湾灘協議会の設置3県だけ
 第7部 次代につなぐ 連載 (2017年6月13日～19日)
- ①英虞湾の挑戦 干拓地を干潟に再生 ②量から質へ 利益保ちカキの養殖量減らす
 ③横浜方式 CO₂削減に「海藻の力」 ④エコラベル 乱獲防ぐ漁法を評価 東京五輪が追い風に
 ⑤ブランド化 魚の資源管理 前面に ⑥連携のかたち 藻場再生へ企業之力
 第8部 転換の時 連載 (2017年6月22日～27日)
- ①水質 発想改め貧栄養防げ ②海ごみ プラ汚染 予防を柱に
 ③酸性化 データ収集 対策急務 ④干潟・藻場 脱温暖化へ再生重要
 ⑤漁業 資源管理と両立が鍵 ⑥豊かさの物差し 地域で議論し決定を

(3) 単元「瀬戸内再生」の授業計画

1) 単元の目標

- ① 新聞の連載記事「海に聞く 瀬戸内再生」が伝えた里海再生における現実・課題と次代への「希望の物語」を取り出すことができる。また、新聞記事がそれをどのように伝えようとしたのかを抽出することができる。
- ② 瀬戸内海がなぜ悪化してきたのか、なぜその再生が求められているのか、その要因や背景について、新聞記事や記者の出前授業の内容から考えることができる。
- ③ 新聞社は、なぜ「海に聞く 瀬戸内再生」を本年度の正月の一面トップ記事として、また1～8部までの長期の連載記事として伝えようとしたのか、その価値判断の背景を読み解くことができる。
- ④ 瀬戸内再生を通して、新たな地域創生を考えていくにはどうすればよいか、個人で判断（意思決定）を行い、自分なりの意見や考えをもつことができる。
- ⑤ 瀬戸内再生のために大学生としての自分たちにできることは何か、教室での仲間や専門家（新聞記者）との協働的・対話的な議論を通して、自分自身の意見や考えを深めることができる。
- ⑥ 瀬戸内再生に向けての自分自身の意見や考えを、「はがき新聞」づくりを通して発信（表現）することができる。

2) 単元の展開計画（全4コマ）

コマ	テーマ	主要な問いと活動
1	<p>導 入：教材との出会い</p> <p>○大学生のためのN I E入門ワークショップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動1 4名程度グループをつくり自己紹介。 ・活動2 個人で本日の新聞を読む。 ・活動3 一押しの記事を選び、グループ内で交流。 ・活動3 今日の新聞を坂本竜馬が読んだら、関心をもつ記事、どのような意見、その理由。 <p>○中国新聞 2016年正月の一面記事「中国山地の今」、2017年正月の一面記事「瀬戸内海の今」の読解</p>	<p>○2017年7月4日の中国新聞朝刊の「喜怒哀楽」を見つけよう。</p> <p>○本日の新聞の一押しの記事を選び、グループ内で紹介しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もし今日の新聞を坂本竜馬が読んだとすれば、どの記事に関心を持ち、どのような意見を述べるだろう。それはなぜ。 <p>○なぜ中国新聞は、「中国山地の今」を2016年の、「瀬戸内海の今」を2017年の正月の一面の記事としたのだろう。</p>
2	<p>展開1：「海に聞く 瀬戸内再生」の読み解き</p> <p>○連載第7部「次代につなぐ」の読み解き</p> <p>○連載第8部「転換の時」の読み解き</p>	<p>○6名で、グループをつくろう。</p> <p>○連載「海に聞く 瀬戸内再生」の第7部「次代につなぐ」(①～⑥)、第8部「転換の時」(①～⑥)を分担して読んでみよう。</p> <p>○読み取った記事内容を、グループ内の他のメンバーに紹介しよう。</p> <p>○瀬戸内海の環境がなぜ悪化してきたのか、なぜその再生が求められているのか、その要因や背景について考えよう。</p> <p>○中国新聞は、なぜ「海に聞く 瀬戸内再生」を本年度の正月の一面トップ記事として、また1～8部までの長期の連載記事として伝えようとしたのか考えてみよう。</p> <p>○次回の新聞記者の出前授業の際に聞いてみたい質問を考えておこう。</p>
3	<p>展開2：「海に聞く 瀬戸内再生」の出前授業（永山啓一記者）</p>	<p>○中国新聞報道部の永山啓一記者による出前授業³⁾</p> <ul style="list-style-type: none"> ・瀬戸内海環境保全特別措置法（瀬戸内法）によって、瀬戸内海はきれいになっている。 ・しかし、瀬戸内海沿岸10府県漁連アンケートでは漁業者は喜んでいない。 ・きれいになったが、豊かな海ではなくなった。 ・新たな課題（①貧栄養化、②マイクロプラスチック、③海洋酸性化）が生まれてきている。 ・①貧栄養化では、ノリやワカメの色落ち、カキの採

		<p>苗不良、漁獲量の減少が起こっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・②マイクロプラスチックでは、海のごみ問題、景観悪化、航路の障害、生態系への悪影響が起こり、「環境への新たな脅威」が生まれている。 ・③海洋酸性化では、貝類やサンゴの成長を阻害する恐れがある。 ・従来からの課題（①干潟・藻場の再生、②ヘドロや海砂採取跡の底質改善、③乱獲、「海離れ」・海への関心低下）も克服されていない。 ・まとめ ・瀬戸内海全体で水質改善を進める段階から、海や灘ごとに水質を管理する段階へ。 ・瀬戸内海の課題は、地球規模の問題ともつながっている。 ・解決のためには、地域ごとに議論し、行動を。 ・そのためには、身近な海を知ることから。 <p>○質疑</p> <p>○ワークシート作業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日の出前授業で特に興味を持ったこと。 ・本日の出前授業に関連して、もっと学んでみたいテーマや内容。
4	<p>展開3：「瀬戸内再生」への意見や考え</p> <p>終 結：「はがき新聞」の作成と交流</p>	<p>○瀬戸内再生を通して、新たな地域創生を考えていくにはどうすればよいか、個人で考えてみよう。</p> <p>○瀬戸内再生のために大学生としての自分たちにできることは何か、教室の仲間の意見や新聞記者の出前授業の内容も参考にしながら考えてみよう。</p> <p>○瀬戸内再生に向けての自分自身の意見や考えを、「はがき新聞」にまとめてみよう。</p> <p>○作成した「はがき新聞」を教室に掲示し、交流しよう。</p>

4. おわりに—研究の成果と今後の課題—

以上考察してきた本研究の成果としては、次の3点を指摘することができる。第1は、新聞をほとんど読まない大学生に新聞の読み方、新聞を通しての学び方、社会的な課題に対して意見や考えを持つことの大切さを伝えることはできたことである。第2は、情報を読み解くためには、また意見や考えを持つためには、読解のための3つの問い（「どのように、どのような」「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」）を発見し、追究することが重要であることを、学生自身が確認することができたことである。そして第3は、新聞を活用したアクティブ・ラーニング型の授業を展開するためには、「新聞記事の読み解き」「記事を書いた記者による出前授業」「意見や考えを発信する新聞づくり」の3つの活動を組み入れることが重要であることを確認できたことである。

課題としては、次の2点を指摘することができる。第1は、本単元の背後にある理論仮説の有効性

を、「はがき新聞」の作成と交流というパフォーマンス活動の分析を通して検証しようと意図したが、典型例の紹介にとどまり、十分にはそれができなかったことである⁴⁾。第2は、「NIE」学習の活動として、1コマの授業内で作成と交流が可能という点で「はがき新聞」づくりを取り上げたが、より認識を深めるためには、もう少し広い紙面でのグループによる新聞づくりや、他の情報発信の方法も工夫する必要があったことである。これらについては、今後の課題としたい⁵⁾。

【注】

- 1) 日本NIE学会編『情報読解力を育てるNIEハンドブック』明治図書、2008、参照。
- 2) 「自然地理(1)」では、前半では地形の分類に基づいて基礎的・基本的概念の習得とそれを活用した世界・日本の地理探究を行うと同時に、後半ではテーマごとの単元学習を行っている。本研究における「瀬戸内再生」は、「里山・里海」をテーマとした単元である。
- 3) 中国新聞報道部の永山啓一記者による出前授業は、7月11日(火)の4コマ目に行った。大学生にとって興味・関心を喚起する授業であったことが、授業中のアンケート調査(出前授業で特に関心を持ったこと、もっと学んでみたいテーマや内容を自由記述させた)の結果明らかとなった。
- 4) 学生が作成した典型的な「はがき新聞」の例を紹介すると、次頁の参考資料の通りである。
- 5) 後期の授業科目「自然地理(2)」では、福山大学内海生物資源研究所(マリオバイオセンター)附属の水族館を事例に、研究所の活動を取り上げた新聞記事を活用した単元の開発を行っている。そこでは、研究所長の出前授業と水族館の見学、それらを踏まえての「コラム」づくりを試みている。また、同じく後期の授業科目である「地誌」では、多文化共生をテーマに、中国新聞備後本社チームによる連載記事「びんご多国籍時代」を取り上げ、紙面の読解と新聞記者の取材記者による出前授業、そしてそれらを踏まえた「はがき新聞」づくりを試みている。これらについては、別稿で考察したい。今後の展望としては、大学生がチームを組んで新聞記者となり、「里山・里海」をテーマとして取材し、新聞記事にまとめることを通して、地域創生に向けた新たな価値を再発見するような授業づくりにチャレンジしていきたい。

【参考文献】

- 1) 小原友行編『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン 中学校編』明治図書、2009。
- 2) 小原友行他編『「思考力・判断力・表現力」をつける中学校地理授業モデル』明治図書、2011。
- 3) 小原友行編『アクティブ・ラーニングを位置づけた中学校社会科の授業プラン』明治図書、2016。
- 4) 小原友行「デジタルメディア時代の新聞活用教育」日本教育方法学会編『デジタルメディア時代の教育方法』図書文化、2011。
- 5) 中国新聞取材班『中国山地過疎 50年』未来社、2016。
- 6) 藻谷浩介・NHK 広島取材班『里山資本主義』KADOKAWA、2013。
- 7) 井上恭介・NHK「里海」取材班『里海資本論』KADOKAWA、2015。

【参考資料】

本単元で受講生が作成した代表的な「はがき新聞」の例は、次頁の通りである。

【追記】

本研究は、平成29年度福山大学教育振興助成金を受けて行った研究成果の一部である。

